

文豪たちの釣旅

大岡 玲

フライの雑誌社の単行本新刊『文豪たちの釣旅』（大岡玲著）より、
〈立原正秋 釣りて人は救われるか?〉の冒頭部を掲載します。

〈立原正秋〉

釣りて人は救われるか？

「飢えた子どもの前で文学は可能か？」というのは、二十世紀フランスを代表する思想家のひとりジャン・ポール・サルトルの言葉だ。実存主義の立場から、やがてアンガージュマン、すなわち「参加」の哲学へと歩を進めた人物ならではの問いの立て方だと思ふ。とは思ふのだが、私には問いかけの立脚点がよく見えない感じがするし、ある種反語的・自省的な表現で文学の可能性を捉えようとしているのだろうが、それでもなんとなくはるか高みから下界を見おろしているような不遜な臭気がただよう気がして、どうも好きになれない。

過酷な状況におちいった人間にとって、想像力がどれほど重要な役割を果たすか、ということについては、もちろん、私もよくわきまえている。ナチスドイツがユダヤ人絶滅のために作った強制収容所アウシュヴィッツの、言語に絶する悲惨を生き延び、その体験を元に『夜と霧』を書いたヴィクトール・フランクルの観察によれば、未来への展望や楽しかったことの記憶、思索の習慣、ユーモアを感じる能力を持たない収容者は、想像力にあふれた者よりもはるかに耐久力が乏しく、次々に斃^{たお}れていったという。

文学もまた、想像力をその根幹に置く表現形式である以上、悲劇的境遇にある人間になんらかの効力を持つかもしれないし、また、「飢えた子供」の姿を映し出す文学行為が、非当事者の意識を覚醒させて、飢餓状況それ自体の解決に結びつく可能性も、まっ

たくなことはないと言いたい。

だが、やはり、かつて開高健がビアフラ内戦の現場に行き、極度の栄養失調のため直腸が肛門からずり落ちてしまわないよう尻の穴にストッパーをして、力なく坐っているだけの子供を見てしまった時、ただ絶句するほかなかったように、非当事者はたぶん黙るしかないのではないか。たとえその光景を語るにしたとしても、いやしくも「文学者」を名乗るような人間であれば、言葉にできない何かを言葉にしようとする自分を疑いながら、絶句と絶句のはさまで無力と絶望をささやくしかないはずだ。まちがっても、軽々しく希望を口にしたたり、声高な糾弾をすることなどないはずである。

話が暗い深みにはまってしまった。少し浮上しよう。

「飢えた子どもの前で文学は可能か？」というフレーズを、ちょっと変えてみる。「ほんとに」飢えた大人の前で文学は可能か？」と。

これについては、わが日本にひとつの答となるような例がある。太平洋戦争に敗北した昭和二十年からの数年間、日本人の多くが十分な食料を得ることができずに飢えていた。その時期、実は文学バブルがあったのだ。

文芸誌といえば、ここ二、三十年恒常的な赤字体質が続いている。大手出版社のいくつかが漫画の収益で潤っていた頃は、税金対策の一環とさえ言われていたのである。ところが、その文芸誌が唯一軒並み黒字だった時期があり、それが敗戦後の数年間だったらしい。食料を得るための貴重な金銭を文芸誌なんかのために払っていたわけだから、当時の大人たちの精神的飢餓がどれほどのものだったか、今の世相ではちょっと想像できない。

言うまでもなく、本を買って読んでいたのは、本来持っていた知的好奇心を戦時体制によって抑圧されていた人々が大部分であるのはまちがいない。しかも、いくら充分に栄養を取っていないといっても、完全な飢餓状態ではなく、金もいくぶんかは手に入れたからこそそんなことができるのであり、ビアフラの子供と同日の論がなせるわけでないのはもちろんのことである。とはいえ、肉体的飢えが極限に立ち到らない限りにおいては、精神的な飢えを満たす何かが必要だ、というのはあきらかだろう。



たちはらまさあき
1926年—1980年。朝鮮半島生まれ。後に日本へ帰化する。『白い罌粟』で直木賞を受賞。純文学と大衆文学をともに手がける流行作家となる。第7次『早稲田文学』編集長。美食家としても有名。代表作に『冬の旅』（読売新聞連載小説）、『残りの雪』など

『文豪たちの釣旅』本文写真から

文豪たちの釣旅

プレビュー掲載 ②

大岡 玲

遊びとしての釣りには、少なくとも人生論的にはほとんど価値がないように感じられてしまう。だが、本当にそうなのか？――

というようなことをつらつら考えているうちに、冗談好きの悪魔がまたしても私の頭の中にくだらけな言い換えを吹きこんでしまった。曰く、「飢えた子どもの前で釣りは可能か？」

真面目な話かと思っていたら、やっぱりいつもの与太話か！と怒られてしまうかもしれないが、しかし、これは単なる与太というわけではない。釣りは遊びである以前に食料獲得のための方法なのだから、飢えた子どもに食べさせるために魚を釣ろうとしているのならば、しごくまっとうな行為である。少なくとも、死にかけている子の前で世界の美について書かれた詩を朗読するよりは、現実的に有効な手段だ。

問題は、遊びとしての釣りを、悲惨な境遇の子供の前でやることになんらかの意味があるか、ということだろう。巨大なナマズが釣れるからといって、内戦の泥沼に陥っている国の河川に、わざわざ出かけていく人間はたぶんいないだろうが、そういう極端なケースを除外するなら、意外に私たちはその種の無慈悲をやらかしている場合がある気がする。親に捨てられたストリートチルドレンが腹をすかして徘徊している南国の海浜都市に、カジキ釣りをしようとでかける大物釣師はたくさんいるし、私自身ケニアからタンザニアを回った時、ビクトリア湖にセスナを飛ばして巨大なナイルパーチとファイトしないかと誘われた経験もある。

別に聖人君子を気取るわけではないし、その時は別の事情もあってナイルパーチにお目にかかる機会を逸したのだが、それでもどこかの奥底にチクチクする痛みを感じたのは事実である。ケニアやタンザニアの経済状況は、日本に比べればきわめてよくない。金持ちもいるが、それはごく一握りであって、国民の多くはセスナをチャーターして釣りに興じるなどという真似は、夢のまた夢（たとえできたとしても、釣りなんて酔狂なことをやるかどうかかわからないが）である。しかも、食料源としてビクトリア湖に移入されたナイルパーチは、つまりは外来魚であって、環境問題のみならず経済がらみの社会問題にまでなっているのが現状だ。お気楽に、やった、巨大魚ナイルパーチを仕留めたぜ、と悦に入っているわけにはいかない。

という風に考えると、遊びとしての釣りには、少なくとも人生論的にはほとんど価値がないように感じられてしまう。だが、本当にそうなのか？

なぜこんな役にも立たないような事柄をうじうじ回しているのかというと、それは立原正秋のせいなのだ。正確には、彼の「七号室」という短篇小説を読んでいるうちに、救いの文学から救いの釣りなどという突拍子もない地点に思考が走っていったのである。遊びの釣りは人を救うことができるか？という問い。

小説好きの人なら、立原正秋と聞いて首をひねるのではないかと思う。釣りとはおよそかけ離れたイメージの作家だからだ。

ごく簡単に立原正秋の生前のプロフィールを述べるなら、「李氏朝鮮の貴族の末裔である父親と日本人女性との間に生まれた日韓混血の出自を持ち、戦争中の日本でそうした出自の者が受けねばならなかった苦痛、『血』をめぐるさまざまなコンプレックス、近親相姦などの性の深遠、能や焼き物といった日本の美意識への沈潜などを、巧みな物語構造と流麗な筆致で描きだした直木賞受賞の流行作家」という風になるだろうか。さらに付け加えるなら、文壇にデビューした頃から鎌倉近辺に居を構え、美食家としても著名だった。魚釣りとの接点を強いて見つけるとするなら、その美食家というあたりだろうか。雑誌などに発表された写真に、獲れたてらしい魚を片手に着流しで海岸を歩いている一葉があつたりするから、漁師との付き合いなどもあつたのだろうと推測できる。とはいえ、たとえば代表作のひとつ『薪能』（これは芥川賞の候補になった）で描きだされた、玄妙かつ深沈としたいとこ同士の恋の悲劇と釣りでは、平仄（ひびく）があまり合うとはいえない。

ところが、そんな彼の短篇に、釣りがずいぶん重要な役割を果たすものがあるのだ。それが『海と三つの短篇』というシリーズの中の『七号室』である。

……

※『文豪たちの釣旅』一九二頁へつづきます



著者略歴 大岡 玲（おおおか・あきら）

1958年、東京都生まれ。東京外国語大学外国学部イタリア語学科卒業。同大学大学院外国語研究科科ロマンス系言語学修士課程修了。87年「緑なす眠りの丘で」で作家デビュー。89年に『黄昏のストーム・シーディング』で三島由紀夫賞を受賞。90年「表層生活」で第102回芥川賞を受賞。小説以外に書評、美術批評、映画批評、グルメ、釣りエッセイ、イタリア語翻訳などを手がけている。最近刊に『本に訊け！』（光文社）。2006年より東京経済大学教授。